ヒンディー語圏における サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターについて

田中敏雄

はじめに
一、ヴラト、カター、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カター
二、ナワルキショール版によるサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カター
三、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターの普及本と採録の事例
おわりに

はじめに

一九六六年の秋のことである。私はデリー大学のジュビリー・ホールに滞在していた。ディーワーリーの祭りの休暇で寮生たちの多くは故郷へ帰り、寮はひっそりとしていた。そんなある日の夜、ベァラーと呼ばれる召使いたちか

ら招かれて、私は集りに出席した。室内の清掃、食事の給仕、寮生たちの命ずる雑用を黙々と果す三十人のベァラーたちは、こざっぱりとした服装で坐っていた。少し離れて、ビハール州出身の三人の門番、マドラース出身の料理人とその家族、パンジャーブ出身の洗濯人とその家族、ウッタル・プラデーシュ州出身の靴屋、清掃人とその家族が坐っていた。ベァラーたちは、一人を除いて、皆、ウッタル・プラデーシュ州クマーオン地方からの出稼人である。夏期休暇二ケ月故郷に帰るだけで、黙々と働き、家族に仕送りをする。

この集りには、事務員を除いて、寮の使用人全員が出席していた。招かれた寮生はクマーオン出身の学生と私の二人だけであった。

法螺貝の音と共に集りが始まった。バラモンがサンスクリットを読み、内容をヒンディー語で解説し、「これで、サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第一章終り」、という区切りで、「さあ、唱えよ、サッティヤナーラーヤン神に勝利あれ」、と会衆に叫びかけると、全員は、「勝利あれ」、と和した。法螺貝の音は高らかに鳴った。およそ一時間の間に五回繰り返えされ、語りが終ると、全員起立して神への讃歌を歌った。燈明を置いたお盆が回って来た。小銭を盆に置き、合掌してから、掌を燈明にかざし、額か胸にあてる――私も見做ってやった。小麦粉に砂糖を混ぜたようなおさがりが全員に配られ、散会となった。

この日、私はサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターに、始めて、接したのである。

翌朝、部屋の掃除に来たベアラーに尋ねると、全員が毎月積立てた金で、故郷からバラモンを招いて行っているとのことであった。現代ヒンディー文学を学んでいる私は、この語りには興味を覚えなかったが、いつもとは違うベアラーたちの表情に心が打たれた。

その後、何回となくこの語りを聞く機会があった。私の関心は、こうした機会に私を招く知人たちの表情—信心深い母親への苛立ちと誇りが交錯している——にあり、語りそのものにはなかった。

だからといって、まったく無関心でいられたわけではない。私が読む小説にも、この語りについての言及が見られるのである。私にとって印象深かった例を二つだけ示すことにしたい。

非暴力不服従運動停止後、ヒンドゥー・ムスリム両教徒の融和、不可触賤民救済などが問題となった時期に書かれた作品である。

町中のパンディットたちから師と崇められている聖者スワーミー・ヨーガーナンダのアーシュラムに一人の不可触賤民が訪れる。弟子たちは追い払おうとするが、ヨーガーナンダは、子宝に恵まれたいという男の願いに耳を傾ける。手相を見てから、断酒、朝夕の沐浴等を指示して、一年以内に男の子に恵まれると予言する。その時、お祝いに、サッティヤナーラーヤンの語りを行うようにいう。予言通り、男の子が生れる。町中のパンディットは語りの依頼を拒む。報告を受けたヨーガーナンダは、自分が語るから、縁者と共に、パンディットを招待するよう指示する。その夜、逆上したパンディットたちは武装して集会を襲撃するが、語り手が師であることを知って驚く。語りが終ってから、師はパンディットたちを説得する、[1] というのである。ここでは、このサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターが、種姓の差別を越えて、誰れもができるものとして積極的に評価されている。

四十年代末から五十年代にかけて、米ソ二大陣営の対立、冷戦が影を落していた時期に書かれた作品がある。二十年間も家から断絶して政治活動に従事しているコムニストがいる。その彼が、父親の喪に服して頭髪を剃り、遺骨をアラーハーバードのサンガムへ流しに行くのを見て、作者は驚く。もっと驚くことが起る。つね日ごろ尊敬し

ている友人がいる。科学的思考をし、思想行動面で革命的なのである。その彼が、ドーティーをまとい、あぐらをかいて坐り、サッティヤナーラーヤンのカターを聞いているではないか。「救急車に轢かれた」思いで目撃した作者が翌日詰問すると、「家内の母親があまりいうものだから」、と弁解した。[2] ここでは、このサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターが、旧世界、その遺制の一つとして否定的に扱われている。

一九七一、七三年に行われた、インド・パキスタンにおけるヒンドゥー・ムスリム両教徒の宗教生活に関する実態調査（団長、東京外国語大学・土井久弥教授）に参加する機会を得て、カターの収集、採録に努めた。七一年の調査地は、ミルザープル、アラーハーバード、ラクナウー、ベナーレス、デリー、インドール、ウッジャイン、七三年には、ハルドワール、リシケーシュ、アラーハーバード、ラクナウー、マトゥラー、インドール、デリーと、北インド、中央インドの各地にわたっており、移動の日数を差引くと、一調査地での滞在日数は限られたものであった。各調査地では、文献では知りえない、ヒンドゥー寺院、宗教施設、家庭内における祭祀の実態を観察することが主目的となり、カターの収集、採録は副次的なものとなった。それでも私たちは、これまで収集の対象とはなりえなかったカターを多数持ち帰ることができたし、[3] また、インドの人々の好意で採録もできた。

収集したカター、採録テープと記録からサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターについて報告したい。[4]

1　Pāṇḍey Becan Śarmā ‘*Ugr*’, “Samāj ke caraṇ”, *Poli imārat*, Dilli, Ātmārām & Sons, 1964, pp. 133—42.

2　Hariśaṅkar Parsāi, “Saṃskāroṁ aur śāstroṁ ki paṛhāi”, *Sikāyat mujhe bhī hai*, Dilli, Rājkamal Prakāśan, 1970, p. 16.

3　東京外国語大学・東京大学東洋文化研究所合同海外学術調査団『昭和四六年度インド・パーキスターン宗教調査関係文献総目

録』『ナワルキショール文献目録Ⅰ』一九七二年。

4　土井久弥『インドの諸宗教（宗教のるつぼ）』アジア仏教史　Ⅴ　俊成出版社　昭四八年、二三六―四八頁にかけて、調査の成果がすでに発表されているので、この報告では調査団のヒンドゥー班（土井久弥、山崎利男、田中）が収集したカター、採録テープを私自身の関心で整理しようと思う。

一　ヴラト、カター、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カター

ここでは、ヴラト（vrat）またはヴラタ（vrata）の語義について辿ることはしない。[1] また綱要書[2]に規定されている内容にも触れない。現在、ヒンディー語圏の人々が共通に理解している内容を箇条書きすることにする。

一、ある日時に、ご利益を得ようとして、断食などの儀式を行うことをいう。

二、ある特定のものを食べ、神を供養する場合と、断食、讃歌だけですます場合がある。

三、ヴラトをしないと災難を蒙るから、あるいは、ある特定のご利益を求めて、また、特定の日時に特別な願かけをするためになされる。

四、一定期間、穀類、水を断ち、定められた時間に果物と牛乳をとる。徹夜をするかまたは床に直接寝る。この間、殺さず、盗まず、犯さず、嘘をつかず、沈黙を守り、ひたすら念ずる。

五、四種姓、四住期の男女はヴラトを行う権利を持つ。但し、主婦は夫の、未婚の娘は両親の、寡婦は息子の許可を得て行う。

六、節制し、ヴラトを行う決意をし、前日には、ナス、ホーレン草、蜂蜜、肉類等をとらない。性交を避け、清浄

を保つ。不浄となったらヴラトを行わない。

七、やむない事情でヴラトを行えない場合、代理人をたてることができる。代理人は夫婦のいずれかあるいは、バラモンがあたる。バラモンへの報酬は換金できるものであってはいけないとされている。

八、ヴラト中に死んだ場合、ご利益は得られ、咎は受けない。

九、欲心、迷妄、妄動でヴラトを途中で止めた場合、贖罪をしなければならない。

十、ヴラト・カター（vrat kathā）を聞く。

願をかけ、願をかけた対象である神の注意を引きつけ、願がかなったら果す約束、お礼がヴラトである。このために、断食、節制、巡礼、聖典を読むこと、祭祀施行、バラモンへの供養、好物を断ったりするのである。[3]

このように、ヴラトは、「願かけ」、「誓願」であり、断食、断ちものに力点を置けば、「断食日」ともなる。ヴラト中は自己を規制しなければならない。この規制に目をやれば、「掟」とも理解される。二次にわたる調査の聞きとりに基づいていえば、「願かけ」としてよいであろう。なにを願うかといえば、除災招福、子孫繁栄の二つにつきている。

現在、ヴラトは主に婦人たちによって行われている。多少の地域差はあるが、共通している手続は、供養の材料を集め、家を清め、祭壇を整え、規定されている場合は断食をし、床に米の粉、ウコン、顔料で模様を描き、神像を安置し、祭祀を行い、カターを聞き、讃歌を歌い、おさがりを配分するのである。

さて、カター、語りであるが、ヴラト・カターは、ラーマ、クリシュナ等のチャリト・カター（carit kathā）（行伝）とは区別されている。チャリト・カターは、古典、近代インド諸文学の重要な分野であり、研究も多く、[4]人々の関心

を引きつけている。ラーマのカターである『ラーマーヤナ』(Rāmāyaṇa)、クリシュナのカターである『バーガヴァタ・プラーナ』(Bhāgavata Purāṇa)は、近代インド諸文学が古典から継承した共通の遺産であり、それぞれの語り手は、ラーマーヤニー(Rāmāyaṇī)、バーガヴァティー(Bhāgavatī)と呼ばれ、著名な人が多い。[5] ところが、ヴラト・カターは、パンディット、家庭僧、家長、年長の婦人によって、ヴラトの際に語られる。いずれも、ヴラトの意義、神々の偉業が平易に例証をもって説かれ、プラーナ文献からの引用が多い。ヴラトを行う日時、その儀規、この地上で誰が行ったか、行うとどういうご利益があるか、行わないとどういう災難にあうか、が語られ、除災招福、厄除開運、無病息災、子孫繁栄、諸願成就を確約するのである。

数あるヴラト・カターの中で、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カター(Satyanārāyaṇ vrat kathā)は特異なものである。まず、それを語る特に定められた日時はない。太陽が一つの天宮に入るサンクラーンティ(Saṃkrānti)の日、満月の日の夕刻が望ましいとされているが、都合でいつでもよいともされている。結婚、入学、卒業、就職、新築祝、災禍が去り、ある願いが成就した時、お礼の意味で行われる。更に重要なことは、ヴラトを遵守することより、カターを聞くことがより功徳があるとされている。

二次にわたる調査地で、ヴラト・カターの中では、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターがもっともよく行われていることが確認された。調査地以外でも、例えば、ガルワール地方で、「バーガヴァタ・カターと並んでよく行われるものはサッティヤナーラーヤンのカター」[6]であり、アワド地方でも、「不吉なこと災難に見舞われると、ヴラトが行われ、サッティヤナーラーヤンのカターが聞かれる」[7]、との調査報告がある。ビハールからの報告によれば、「サッティヤナーラーヤンあるいはサッティヤデーヴァ(Satyadeva)は極めてポピュラーである。年に一度、あるいは毎月

行われる。入門式、結婚式、その他、慶事の際にサッティヤデーヴァの供養が行われる。サッティヤデーヴァの供養は諸願が成就した際に行われるもので感謝祭と云ってよかろう[8]」、とのことであり、少々古い記述であるが、「……讃歌が歌われ、施主は踊るようにと求められる……この供養は、マラータの各地と連合州でもっともポピュラーである[9]」、とのことである。「北インドの農村部で特にポピュラーであり、約二五〇—三〇〇年前に定着した[10]」とされている。

1 P. V. Kane, "The word *vrata* in the Ṛgveda", *JBBRAS*, Vol. 29, Part 1, (June, 1954), pp. 1—28.

2 Kāśinātha Upādhyāya, *Dharmasindhu*, ed. by Mihircandra Śarmā, Bambai, Veṅkaṭeśvar Press, 1961. Kamalakarabhaṭṭa, *Nirṇayasindhu*, ed. by Daulatrām Gauṛ, Vārāṇasi, Ṭhākurprasād & Sons, 〔1970〕. Viśvanātha Śarmman, *Vratarāja*, ed. by Mādhavācārya Śarmā, Bambai, Veṅkaṭeśvar Press, 1963. Saṅkarabhaṭṭa, *Vratārka*, ed. by Maheśdatt Tripāṭhi, Lakhnaū, Navalkiśor Press, 1877.

3 Rāmdās Gauṛ, *Hindutva*, Kāśi, Gyānmaṇḍal, 〔1938〕, pp. 756—57. Benjamin Walker, *Hindu world*, London, 1968, pp. 581—82. 井原徹山『印度教』大東出版社　昭一八年、四七〇—五四一頁。

4 例えば C. Bulcke, *Rāmkathā*, Prayāg, Prayāg Viśvavidyālay, 1962.

5 ラーマーヤニーの代表として、ラーデーシャーム (Rādheśyām) の名は有名である。第一次調査の際、アラーハーバードのジュースィー (Jhūsi) で、聖者ブラブダット・ブラフマチャーリー (Mahārāj Prabhudatt Brahmacārī) に面会した。聖者は、『バーガヴァタ・ダルシャン』(*Bhāgavata darśan*) と題する『バーガヴァタ・プラーナ』の翻訳解説に没頭していた。四六年に第一巻、七一年現在で第八五巻。一〇八巻で完結するということであった。

6 Mohanlāl Bābulkar, *Garhvāli lok-sāhitya kā vivecnātmak adhyayan*, Prayāg, Hindi Sāhitya Sammelan, 1964, p. 201.

7 Sarojini Rohatgi, *Avadhī kā loksāhitya*, Dilli, National Publishing House, 1971, p. 86.

8 Viśvanāth Siṃh, *Merā gāṅv mere log : Baṛhiyā kā vṛtt*, Baṛhiyā, Viśvanāth Siṃh, 1972, p. 87.

9 P. Thomas, *Hindu religion, customs and manners—describing the customs and manners, religions, social and domestic life, arts and sciences of the Hindus*, Bombay, D. B. Taraporevala Sons & Co., [n. d.], p. 145.

10 Rāmpratāp Tripāṭhī, *Hinduoṁ ke vrat, parva aur tyohār*, Ilāhābād, Lokbhārati Prakāśan, 1971, p. 377.

二　ナワルキショール版によるサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カター

町の小さな本屋、街頭、沐浴場へ通ずる路上で、パトラー（patrā）あるいポーティー（pothī）と呼ばれる縦12×横25センチの小冊子が売られている。ヴラト・カターの他に、結婚、祖霊追善供養の訳付儀規解説書がこれである。いわゆるインドロジー関係専門書を扱う書店には置かれていない。巡礼や村からやって来たパンディットが買い求めている。おそらく、村のパンディットの「アンチョコ」として使われるのであろう。

本来ならば付録として出すべきであろうが、報告を進めやすくするため、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターの訳を出すことにする。ナワルキショール版[1]を用いる。理由はあとで述べることにする。供養、護摩に要する材料、祭壇、床に描く模様、儀規等は削除し、カターだけを翻訳する。サンスクリットのテキストの解釈の相違は、註釈者の解釈に従う。括弧内の数字は頌の番号を示す。人名等の個有名詞はサンスクリット読みになるため、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターはサッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カターとなる。註釈者、パンディット・クーブチャンド・シャルマーは、パティヤーラー、マヘーンドラガル、バサイー（Paṭiyalā, Mahendragaṛh, Basai）の住人であ

った。

1　*Satyanārāyaṇa vrata kathā*, annotated by Khūbcand Śarmā, Lakhnaū, Navalkiśor Press, [n. d.].

物語、始まり。ヴャーサ（Vyāsa）は語った。ある時、ナィミシャ（Naimiṣa）の森で、ショウナカ（Śaunaka）を始めとする聖仙たちが、プラーナに通じているスータ（Sūta）に尋ねた。（1）願かけと苦行によって、望むがままのご利益が得られるでしょうか。話して下さい。すべてを聞きたいと思います。（2）

スータは語った。ナーラダ（Nārada）仙に尋ねられて、カマラー（Kamalā）の主、ヴィシュヌ（Viṣṇu）神が語ったことを話しましょう。注意深く聞きなさい。（3）

ある時、ナーラダ仙は、人々のためにと願い、さまざまな世界を巡り、この世にやって来た。（4）　ここで、人々がさまざまな苦悩に喘ぎ、生きとし生けるものが自らの業苦で悶えているのを見て、（5）　どうしたら人々の苦悩は除かれるか、と考えながら、ヴィシュヌ界へ行った。（6）　そこで、白い肌をした、四本の腕を持つ、法螺貝、輪盤、棍棒、蓮華を持ち、花輪をしたナーラーヤナ神を（7）　見て、神々の神を讃えようとした。ナーラダ仙は語った。ことばや心ではおしはかれない姿に、無限の力に、（8）　始めも間も終りもないものに、属性を持たないものに、属性を作るものに、あらゆるものの始源に、信徒たちの苦悩を除くもの、あなたに敬礼いたします。（9）　讃辞を聞いて、ヴィシュヌ神はナーラダ仙に答えた。なんのためにやって来たのか。なにを考えているのか。（10）　いいなさい。すべてを話そう。ナーラダ仙は語った。この世では、人々がさまざまな苦悩に喘ぎ、生きとし生けるものが罪業で悶え苦しんでおります。（11）　神よ、簡単な方便で鎮めることができないものでしょうか。私にお恵みがありますなら、

お話し下さい。すべてを聞きたいのです。(12)　神は語った。息子よ、人々のためを願い、よくぞ尋ねた。迷妄から逃れる方便を語ろう。聞きなさい。(13)　息子よ、この世でも天国でも稀な、きわめて功徳のある願かけがある。おまえがいとしいから、いま、語ることにしよう。(14)　サッティヤナーラーヤーナへの願かけを儀規に則って行うと、たちどころに幸福になり、最後には解脱が得られよう。(15)　神のことばを聞いて、ナーラダ仙は語った。その願かけによるご利益は、儀規は、誰がその願かけを行ったか、(16)　いつ行われるか、すべて詳しくお話し下さい。神は語った。この願かけは、苦しみ悲しみなどを除き、富、財産を増し、(17)　幸福と子孫をもたらし、いたるところで勝利を与えるものである。いつでも、敬虔でひたむきな気持になって、(18)　バラモンや縁者たちと共に、夕方、サッティヤナーラーヤナ神の供養をするように。(19)　一と四半分の一の量の最上の食物を供物として捧げるように。バナナ、ギー、牛乳、小麦粉、(20)　小麦粉がなければ米の粉、それに砂糖または粗糖を一と四半分の一の量ずつ集めて捧げるように。(21)　人々と一緒に物語を聞いて、お布施を出すように。それから縁者たちと共にバラモンに食事をさしあげるように。(22)　おさがりをありがたくいただいてから、歌舞を楽しむように。それから、サッティヤナーラーヤナを念じながら家に帰るよう。(23)　こうすると、人々の願いはまちがいなく成就されよう。汚濁の世、この地上では、特にこれこそが簡単な方便である。(24)

これで、スカンダ・プラーナ(Skanda Purāṇa)、レーヴァー編、(Revā khaṇḍa)サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第一章、終り。

スータは語った。バラモンたちよ、この願かけを行ったものについて話しましょう。

美しいカーシー（Kāśi）の町に、ある貧しいバラモンが住んでいた。（1）　いつも飢えに苦しみさまよっていた。バラモンをいとおしむ神は、苦しんでいるバラモンを見て、（2）　老いたバラモンの姿をし、うやうやしく尋ねた。（3）　バラモンよ、なぜいつも苦しみさまよっているのですか。（3）　バラモンよ、お話し下さい。すべて聞きたいのです。バラモンは語った。私はたいへん貧しいバラモンです。喜捨を求めてさまよっているのです。（4）　もし、なにか方便をご存じなら、どうかお話し下さい。老いたバラモンは語った。ヴィシュヌ神であるサッティヤナーラーヤナ神は望むがまゝのご利益を授けるものです。（5）　バラモンよ、サッティヤナーラーヤナの供養をし、このうえもない願かけをしなさい。この願かけによって、人はあらゆる苦痛から免れるのです。（6）　願かけの儀規をバラモンに詳しく説明して、老バラモンのサッティヤナーラーヤナ神はその場で姿を消した。（7）　老バラモンが語ってくれた願かけをかならずしよう、こう考えて、その夜、バラモンは眠れなかった。（8）　朝起きて、サッティヤナーラーヤナに願をかけよう、と心に決めて、喜捨を求めに出た。（9）　その日、バラモンはたくさんの金銭を得た。それで、縁者たちと共にサッティヤに願をかけた。（10）　願かけによるご利益で、バラモンはあらゆる苦悩から免がれ、裕福になった。（11）　その時から、毎月、願かけを行うようになった。ナーラーヤナに願かけをし、（12）　あらゆる罪から免がれ、解脱を得た。バラモンたちよ、この地上で、この願かけを行えば、（13）　人のあらゆる苦悩は滅する。このようにナーラーヤナがナーラダ仙に語ったものを、（14）　私はそのまま話したのです。これ以上なにを話せましよう。聖仙たちは語った。そのバラモンから聞いて、この地上でこの願かけを行ったものは誰ですか。スータよ、すべてを聞きたいのです。私たちはこの願かけを信ずるようになりました。（15）　スータは語った。バラモンたちよ、聞きなさい。この地上でこの願かけを行ったものについて話しましよう。

ある時、そのバラモンは、富に応じて盛大に、(16) 縁者、家族のものと一緒に願かけを行おうとしていた。その時、木樵がやって来た。(17) 薪を外に置いて、バラモンの家に行った。木樵はとてものどが渇いていた。願かけをしているバラモンを見て、(18) 敬礼をして、尋ねた。あなたはなにをしているのですか。そうするとどういうご利益があるのですか。どうぞ詳しく話して下さい。(19) バラモンは語った。これはあらゆる願いをかなえてくれる、サッティヤナーラーヤナの願かけです。このおかげで、私は財産を得たのです。(20) バラモンからこの願かけを知って、木樵はたいへん喜んだ。おさがりをいただき、水を飲んでから町へ行った。(21) サッティヤナーラーヤナ神を念じて、今日、薪が売れたら、(22) その金で、サッティヤナーラーヤナに願かけをしよう、こう考えて、薪を頭の上に置いて、(23) 金持たちの住んでいる美しい町へ行った。その日、薪は二倍の値段で売れた。(24) 喜んだ木樵は、よく熟したバナナ、砂糖、ギー、牛乳と小麦粉を、(25) 一と四半分の一ずつ求めて家に帰った。縁者たちを招き、儀規通りに願かけをした。(26) その願かけのおかげで、財産と息子に恵まれた。この世を幸福に過ごし、最後には天国へ行った。(27)

これで、スカンダ・プラーナ、レーヴァー編、サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第二章、終り。

スータは語った。では、話を続けましょう。お聞きなさい。

昔、ウルカームカ (Ulkāmukha) という名の賢い王がいた。(1) 自制心があり、真実を語る王はいつも寺院に参詣していた。毎日、バラモンたちに布施をしていた。(2) 貞淑な妻はプラムグダー (Pramugdā) といって、顔は蓮の花のようであった。バドラシーラー (Bhadrasīlā) 河の岸辺で、サッティヤに願かけをしていた。(3) そこに、商売

のために多額な財宝を持った、一人の商人がやって来た。(4)　船を河岸に着けて、願かけをしている王の傍に行き、うやうやしく尋ねた。(5)　王よ、あなたはたゞひたすらになにをなさっているのですか。お話し下さい。聞きたいのです。(6)　王は語った。商人よ、息子に恵まれるよう願って、家人と共にたぐい稀なるヴィシュヌ神に願かけをし供養をしているのです。(7)　王のことばを聞き、商人はうやうやしく尋ねた。すべてをお話し下さい。あなたがおっしゃることをいたしましょう。(8)　私にも子供がおりません。これによってきっと子宝に恵まれるでしょう。商売を終えてから喜び勇んで家に帰った。(9)　子孫を授ける願かけについて妻に語り、子供が生れたら、願かけをしよう、(10)　こう商人は妻のリーラーヴァティー(Līlāvati)に語った。貞淑な妻リーラーヴァティーは、サッティヤの恩寵で懐妊した。(11〜12)　十ケ月目に玉のような娘を生んだ。娘は、白半月の月が日々に明るくなるように、成長した。(13)　だからカラーヴァティー(Kalāvati)と名付けられた。そこでリーラーヴァティーは夫にやさしく云った。(14)　願かけをすると心に決めていたのに、なぜなさらないのですか。商人は云った。この子の結婚式の時にしよう。(15)　こう妻に約束して町へ行った。娘カラーヴァティーは成長した。(16)　成長した娘を見て、商人は友人たちと相談して、すぐに使いを送った。(17)　娘のために立派な花婿を探すように、と商人に命ぜられて、使者はカーンチャナ(Kāñcana)の町へ行った。(18)　そこからヴァィシャ種姓の少年を連れて来た。顔立ちもよく徳がそなわっているのを見て、(19)　縁者たちと共に満足した商人は、儀式に則って、娘を少年に与えた。(20)　ところが運悪く、結婚式の時に、願かけを忘れてしまった。神は怒った。(21)　商人は婿を伴い、(22)　海のほとりにある美しいラトナサーラプラ(Ratnasārapura)へ行って商売をした。(23)　二人はチャンドラケートウ(Candraketu)王の美しい都へ行った。その時、サッティヤナーラーヤナ神は、(24)　願かけを怠っているのを見て、ひどい災難を蒙るであろう、と呪

いをかけた。(25)　ある日、王の財宝を盗んだ盗賊が、二人のいるところにやって来た。(26)　後から兵士たちが追って来るのを見て、脅えた盗賊はそこに財宝を置いて姿を消した。(27)　兵士たちはやって来た。王の財宝がそこにあるのを見て、二人の商人を捕縛した。(28)　王のところへ走りよって兵士たちはいった。二人の盗賊を捕えてまいりました。ごらん下さい。ご命令を。(29)　王の命令で、二人はたゞちに固く縛りあげられ、城中の牢獄に入れられた。取り調べはなかった。(30)　サッティヤデーヴァの幻力により、誰も二人のいうことを聞かなかった。チャンドラケートウ王は二人の財宝を没収した。(31)　その後、家では二人の妻はたいへん苦しんだ。盗賊が家にあった財産を掠奪した。(32)　身心共に悩み、飢えに苦しみ、食物を乞い求めて家々を巡るようになった。娘カラーヴァティーも毎日、巡りだした。(33)　ある日、空腹をかゝえてバラモンの家に行った。そこで、サッティヤナーラーヤナの願かけを見た。(34)　坐って物語を聞き、神に祈り、おさがりをいたゞき、夜、家に帰った。(35)　母親のカラーヴァティーはやさしくいった。夜分、どこへ行っていたの。なにを考えているの。(36)　娘カラーヴァティーはいった。おかあさん、バラモンの家で、なんでも願いをかなえてくれる願かけを見ました。(37)　娘のことばを聞き、喜んだ商人の妻は、サッティヤナーラーヤナに願かけしようとした。(38)　貞淑な妻は家族縁者と共に、夫と婿が早く家に戻るように、と願かけをした。(39)　夫と婿の過失をお許し下さるように祈った。すると、サッティヤナーラーヤナは満足した。(40)　チャンドラケートウ王の夢に現われて告げた。王よ、朝になったら二人の囚人を釈放せよ。(41)　没収した財宝は返せ。そうしなければ、領地、財宝、息子もろとも滅ぼすぞ。(42)　こう王に告げて神は姿を消した。朝になると王は従者を伴い、(43)　宮廷にのぞみ廷臣たちに夢で見たことを話した。囚われている二人の商人をたゞちに釈放せよ。(44)　王の命令で二人の商人は牢獄から王の前に連れだされた。(45)　連れだされた二人の商人はチ

ャンドラケートウ王に敬礼した。(46)　いまゝでのいきさつを想い出して恐怖におのゝいていた。二人の商人を見て、王は礼をつくしていった。不運にもひどい災難にあったが、もう恐れなくてもよい。手枷足枷を外させ、沐浴をさせた。(48)　王は二人に衣服装身具を与え、いたわりのことばをかけた。(49)　王は没収した財宝を二倍にして返していった。商人よ、家に帰りなさい。(50)　王に敬礼していった。あなたのおなさけで帰れます。こういって二人の商人は家に向った。

これで、スカンダ・プラーナ、レーヴァー編、サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第三章、終り。

スータは語った。

商人は旅立ちの儀式を行い、バラモンたちに布施をし、町へ向った。(1)　しばらく行くと、サッティヤナーラーヤナ神は商人に尋ねた。商人よ、おまえの船にはなにがあるか。(2)　すると驕りたかぶった二人は蔑み笑った。行者よ、なにを聞いているんだい。お金が欲しいのかい。(3)　私の船にはつたや葉っぱだけ。ひどいことばを聞き、おまえのことばが本当であるように、(4)　と云って行者はすばやく立ち去った。しばらく行ってから岸辺に立った。(5)　行者が立ち去ると、商人はいつもの務めをすませた。その時、船が浮び上っているのを見て驚いた。(6)　船につたや葉っぱだけがあるのを見て卒倒した。意識が戻り、考えだした。(7)　婿がいった。どうして悲しんでいるのですか。あの行者が呪いをかけたのです。(8)　おすがりしましょう。きっと願いをかなえて下さるでしょう。(9)　婿のことばを聞いて行者の傍へ行った。頭を下げ、たゞひたすらに懇願した。(10)　非礼なことを申しました。罪をお許し下さい。こうして繰り返えして頭を下げ、嘆き悲しんだ。(11)　これを見て行者はいった。泣くな。私の

ことばを聞け。おまえは私の供養を怠った。(12)　愚かなものよ、私の命令で繰り返えして災難にあったのだ。神のことばを聞くと、商人は讃えだした。(13)　あなたの幻力に眩惑されて、ブラフマ(Brahma)を始めとする神々があなたの徳と姿を知らないではありませんか。神よ、愚かな私が、あなたの幻力に眩惑されて、あなたを知らないとしても驚くことではありません。(14)　富に応じて盛大にあなたの供養をいたしましょう。(15)　あなたにおすがりいたしております。お助け下さい。財宝を元通りにして下さい。ジャナールダナ(Janārdana)はこのひたむきなことばを聞いて満足した。(16)　ハリ(Hari)は願いをかなえて姿を消した。船に乗ると財宝は元通りになっていた。(17)　サッティヤデーヴァの恩寵で私の願いはかなえられた、といって、商人は同行者と共に、儀規に則って供養を行った。(18)　サッティヤデーヴァのおかげで喜び勇み、船を整えて国へと向った。(19)　商人は婿にいった。私の町、ラトナプリー(Ratnapuri)を見なさい。使いを送った。(20)　使いは町へ行き、商人の妻に手を合せてこう伝えた。(21)　町の傍まで、商人が婿と仲間と共に、多額の財宝を持ってやって来ました。(22)　使いのことばを聞いて貞女はたいへん喜び、サッティヤデーヴァの供養をしてから娘にいった。(23)　これから会いに行きます。おまえも早くおいで。母のことばを聞くと、願かけを終って、(24)　おさがりをそのまゝにして、夫に会いに行った。このことに怒ったサッティヤデーヴァは、夫、船、(25)　財宝を水に沈めてしまった。夫の姿が見えないので、(26)　悲しみ嘆き、卒倒してしまった。(27)　沈んだ船と嘆き悲しむ娘を見て、商人は脅え、驚いた。水夫たちも心配した。(28)　卒倒した娘を見て、リーラーヴァティーは動転した。泣き叫びながら夫にいった。(29)　船もろとも婿はどうして見えなくなってしまったのです。どの神を蔑ろにしたために船は沈んでしまったのでしょうか。(30)　サッティヤデーヴァのすばらしさを誰が知ることができましょう。こういって身内のものたちと泣きだした。(31)　リーラーヴァティーは

娘を膝に抱きあげて泣いた。夫を失い、嘆き悲しむリーラーヴァティーは、(32)　夫のはきものを手にして、夫の後を追おうとした。娘の行いを見て、悲嘆にくれた商人は考えた。(33)　サッティヤデーヴァが船を沈めたのだ。私はサッティヤデーヴァの幻力に眩惑されているのだ。(34)　富に応じて盛大に、サッティヤの供養をしよう。皆を招き、自分の気持を話し、(35)　地に平伏して、繰り返えし繰り返えしサッティヤデーヴァに祈った。すると、悩めるものの庇護者、サッティヤデーヴァは満足した。(36)　信徒をいとしく思う神はいった。おまえの娘は夫に会おうとして、おさがりを残してやって来た。(37)　だから娘の夫は姿を消したのである。家に行き、おさがりをいたゞいてから戻れば、(38)　娘はまちがいなく夫を得るであろう。娘は天からの声を聞いて、(39)　急いで家に行った。おさがりをいたゞいてから戻ると、夫がいた。(40)　カラーヴァティーは父親にいった。さあ、家に行きましょう。どうして急がないのですか。(41)　娘のことばを聞き、商人は満足した。サッティヤデーヴァの供養を儀規通りに行い、(42)　財宝と仲間たちと共に家に行った。満月と太陽が一つの天宮に入るサンクラーンティの日にサッティヤの供養を行った。(43)　この世で幸福に過ごし、最後には天国へ行った。(44)

これで、スカンダ・プラーナ、レーヴァー編、サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第四章、終り。

スータは語った。さらに話を続けましょう。お聞きなさい。

人民を守護するトゥンガドヴァジャ（Tuṅgadhvaja）という王がいた。(1)　王はサッティヤデーヴァのおさがりを蔑ろにして災難を蒙った。ある時、王は森へ行き、多くの獣を殺し、(2)　榕樹の下にやって来た。そこで、牛飼いたちが、敬虔にひたむきに、サッティヤの供養をしているのを見た。(3)　王は見たが、驕りのために行かなかった

し、挨拶もしなかった。牛飼いたちはおさがりを王の傍に（4）　置き、戻ってから心ゆくまでおさがりを食べた。王はおさがりを蔑ろにして災難を蒙った。（5）　百人の息子と富、財産などすべて失った。サッティヤデーヴァのためだ、（6）　だから、サッティヤデーヴァの供養が行われているところへ行こう、こう考えて牛飼いたちのところへ行った。（7）　牛飼いたちと共に、敬虔にたゞひたすらに、儀規通りにサッティヤデーヴァの供養を行った。（8）　サッティヤデーヴァの恩寵で、富と息子たちに恵まれた。この世を幸福に過ごし、最後には天国へ行った。（9）　まことにありがたいサッティヤの願かけをするものは、望むがまゝのご利益をもたらすおめでたい物語を、たゞひたすらに聞くものは、（10）　サッティヤデーヴァの恩寵で富と子孫に恵まれる。貧しきものは富を得る。拘束をうけたものは束縛から解放される。（11）　脅えているものは恐怖から救われる。これは本当であり、疑いない。望むがまゝのご利益を得て、最後には天国へ行ける。（12）

バラモンたちよ、あなたがたにサッティヤナーラーヤナの願かけについて語りました。この願かけをすると、あらゆる苦悩から解放されるのです。（13）　特に、この汚濁の世では、サッティヤの供養こそご利益をもたらすものであります。あるものはカーラ（Kāla）と云い、サッティヤともイーシャ（īśa）とも、（14）　サッティヤナーラーヤナとも、あるものはサッティヤデーヴァとも呼ぶでしょう。神はさまざまな姿をして、あらゆる人々の願いをかなえてくれるものなのです。（15）　この汚濁の世では、サッティヤへの願かけこそが正統でありましょう。ヴィシュヌ神があらゆる人々の願いをかなえる姿をとったのです。（16）

聖仙たちよ、サッティヤデーヴァの物語を聞くもののあらゆる罪は、サッティヤデーヴァの恩寵で消え去るであろう。（17）　聖仙たちよ、サッティヤナーラーヤナの願かけをしたものの転生について話しましょう。（18）

賢者シャターナンダ（Śatānanda）はスダーマー（Sudāmā）となった。クリシュナを念じて解脱を得た。（19）　木樵はニシャーダ（Niṣāda）の王となり、ラーマに仕えて解脱を得た。（20）　ウルカームカ王はダシャラタ（Daśaratha）王になった。ランガナータ（Raṅganātha）を供養して天国へ行った。敬虔な商人はモーラドヴァジャ（Moradhvaja）王となった。肉体を鋸で切り、神に供えて解脱を得た。（22）　トゥンガドヴァジャ王はスヴァーヤムブー（Svāyambhū）となり、あらゆるものを神の信徒にして天国へ行った。（23）

これで、スカンダ・プラーナ、レーヴァー編、サッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター、第五章、終り。

三　サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターの普及本と採録の事例

収集した普及本の特徴を列記したい。括弧内の数字はナワルキショール版の頌を指す。

ヴェーンカテーシワル版[1]の構成は、ナワルキショール版と同一、つまり、五章よりなり、それぞれ、二四、二七、五一、四四、二三頌である。カターの終りに、アールティー（ārti）、つまり、讃歌が付されているが、註釈者の名は挙げられておらず、ヒンディー訳は極めて不自然なものである。

バールガヴァ版[2]の構成も同じであるが、註釈者は、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターの意義を説き、このカターについての疑惑に対して反論し、更に、このカターからどのような教訓を得るべきか、十ケ条挙げている。また親切にも、語り手が暗誦すべき詩句を挙げ、ナィミシャの森を訪れたスータを聖仙たちが迎える時（I—1）、聖仙たちがスータに尋ねる時（I—2）、歌うよう指示している。この世を汚濁の世、末世とすることを特に強調し、汚濁の世に言及したトゥルスィーダース（Tulsīdās）の詩句を一頁にわたって掲げ、これらを朗誦するようにとも指示し

ている。自らも第一章の註釈に詩句を三編挿入している。この親切さのためか、この版はよく売れているようで、註釈者は海賊版の横行を嘆いている。

ドゥルガー・プスタク・バンダール版は二種類あり、一つは[3]なんら特徴はないが、もう一つは[4]、註釈者が雅号を持つ詩人のためか、一章に二四、二章以下、それぞれ、六、一五、一五、四の詩句が挿入されている。人々がよく親しんでいる詩句ばかりでなく、自作の詩、箴言、格言、諺なども動員されている。一章に二四も挿入されていることは、汚濁の世を強調すると共に、カターの導入で、聞き手を引きつけ魅了する技術でもあろう。汚濁の世に言及して自作の詩を挿入している。散文訳を示すと、「……神を讃える語りに興味を示さず、経典に関心を払わない。英語を習い紳士を気取って酒を飲む。聖地寺院を破壊し、布施功徳をしない。親を蔑ろにし、儀規マントラ（mantra）を嘘だと云う。大麻、阿片に酔い痴れて……」、となる。これが語り手の抑揚をつけた声に乗ると、聞き手は共感するのであろう。行者に変装したサッティヤナーラーヤンに嘘をつき、船を沈められて嘆き悲しむ商人を婿は慰める（Ⅳ—8）。註釈者はこういう。「心労（チンター cintā）が火葬の薪（チター citā）にいうことにや、私の方が偉いのよ。あんたは死体を焼くけれど、私は生きてるものを焼きつくす」単なる語呂合わせであるが、聞き手は共感するのであろう。

デリーにある二つの出版社から三点[5]出ているが、普及版そのものであり、述べるに価しないが、デリー周辺、ハリヤーナー、パンジャーブ州等の農村部に市場を持っているようである。

その他、スィック教徒による註釈もあり[6]、このカターの普及ぶりを物語るものである。

同じ五章の構成をとるものでも頌の数が異なり、話の筋が違う版がある。

ケーラーリーラール版[7]は一章だけが三二頌あり、挿入された詩句、箴言、格言は二五に及び、儀規の説明が詳細で

ある。第二章以下、それぞれ、一〇、一〇、一二、四箇所にわたって詩句などが挿入されている。第五章、トゥンガドヴァジャ王の話（Ⅴ―1～5）であるが、次の話が挿入されている。狩猟中従者たちとはぐれた王は亡霊に会う。空腹の亡霊は王を食べようとするが、城で食事を与えることを約束して、王は亡霊を森の外へ連れだす。榕樹の下に来た時、牛飼いたちが供養しているのを見る。牛飼いたちはおさがりを持って来る。空腹の亡霊がこれを食べた瞬間、空から乗りものが迎えに来る。かつてグジャラートの住人であった亡霊は解脱した。一方、おさがりに手をつけなかった王は災難にあった。

構成は五章であるが、頌の数が多く、話の筋も異なる版[8]がある。頌の数は、七五、一一九、三〇、五〇、五九となっている。二章、願かけによるご利益で、バラモンはあらゆる苦悩から免がれ裕福となった（Ⅱ―11）の箇所は、具体的になっており、バラモンは、馬車、象、金の装身具、財宝、男女の召使いたち、乳を出す牛と水牛、それにサッティヤナーラーヤン神への隷属を求めている。木樵とバラモンの対話も詳細であり、バラモンは、ケーダーラマニプラ（Kedāramaṇipura）の王チャンドラチューラ（Candracūra）に教えた儀規だとことわってから説明している。三章では、ウルカームカ王ではなく、マニプラのチャンドラチューラ王が臣下のものたちとヴラトをしていると、ラトナプラの住人である商人がやって来る、となっている。貞淑な妻リーラーヴァティーはサッティヤの恩寵で懐妊した（Ⅲ―11～12）が、この版では、懐妊しやすい時期だったので、としている。四章で、二人はチャンドラケートウ王の美しい町へ行った（Ⅳ―23）、とあるが、この版では、ナルマダー川の辺りでルビー、真珠の商いをした、となっている。王の兵士たちに逮捕された経緯（Ⅳ―26～28）については、盗賊を逮捕しなければ死刑に処すと厳命された兵士たちが二人を盗賊にしたてた、としている。しかも首枷で一二年間獄中で過す。家では（Ⅳ―32）盗難に火災、差押えが続き、また、

釈放になったのは無実が証明されたからである。五章は、商人による盛大な供養で終り、ナワルキショール版に見られるエピローグはない。

七章の構成をとるものが二点[9]あるが、いずれも、ナワルキショール版の一、二章が三つの章に分けられ、頌の数は、二〇、三七、一五、あるいは、二〇、三五、一七となっている。いずれも、スータとショウナカ、ナーラーヤナとナーラダの対話が詳細であり、儀規の説明に力点が置かれているが、話の筋に変りはない。

各調査地で確認したことであるが、ナワルキショール・ヴェーンカテーシワル・バールガヴァ版の系統がもっともよく普及していた。五章一六九頌のテキストは通読して一〇分程度、解説しても一時間たらずのものである。三つの版の中で挿入箇所がなく、訳も不自然でないのがナワルキショール版であり、これに基づいて訳出したわけである。これらの普及版を基に、語り手は語るわけで、興がのると、ドルガー・プスタク・バンダール版の二、とかケーラーリーラール版のような内容になるのである。語り手は、カターの導入部、第一章に力点を置き、これこそが汚濁の世における唯一のヴラトであることを力説する。カターの成否は、語り手の声量、話術、学識等によって左右されるが、聞き手の反応、つまり、語り手と聞き手の関係が重要な問題となって来る。

採録テープ、記録を検討すると、普及本で指摘された問題を再確認することになるので、繰り返えしを避け、語り手、語り手と聞き手の関係に触れ、語り手がテキストに基づきながらも解釈をどこまで拡大できるかの事例を示すことにしたい。

七三年に、私たちが接した語り手であるが、いずれもヴラト・カターだけ語ることを職業としていなかった。デーラードゥーン（Dehrādūn）のサッティヤナーラーヤン寺院の祈禱僧には寺院を経営している財団から俸給が支払われ

ていたし、アラーハーバード、デリーでの語り手は印刷工場で働いていた。インドールで接した二人の語り手は、退職教員であった。

ガンジス河の右岸、ハルドワール（Hardvār）からリシケーシュ（Ṛṣikeś）に通ずる街道沿いにある、サッティヤナーラーヤン寺院に二度訪れた。およそ三〇〇年前、聖者スワーミー・ヴィシュッダーナンダ（Bābā Kālikamlivāle Svāmi Viśuddhānanda Mahārāj）が原生林で苦行していると、サッティヤナーラーヤンが現われた。それで、この地に聖者は寺院を建立したと伝えられている。大理石の一枚板から彫られたラクシュミー・ナーラーヤン（Lakṣmi Nārāyaṇ）の像が安置されている。この寺院と向い合って巡礼宿泊所があり、これらの間に、大きな菩提樹、シヴァ（Śiva）、ガルダ（Garuḍa）の祠がある。この寺院を始め、ハルドワール、リシケーシュで巡礼宿泊所、道場、学校等を経営するチェッタール（Chettār）財団から、祈禱僧パンディット・ギーターラーム（Pt. Gītārām）は俸給月額一二七ルピーを得ている。祈禱僧としての日課は、朝五時、供養、九時に供物を棒げ、夕方六時半、供養、八時に牛乳を供え、八時一五分、お休みいたゞく儀式を行う。賽銭を記帳し、参詣人や村人の依頼でサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターを語る。一五歳の時、家出し、カーシミール、パンジャーブを放浪し、行者たちと交わり、祈禱僧として就職したのは四九歳の時であった。一三人の子持ちである六四歳の老僧は、農閉期にウッタルカーシー（Uttarkāśi）の村へ帰り、あるいは妻が訪れるという。祈禱僧の話によると、こゝ一五年間、このあたりにサッティヤナーラーヤン寺院が七つも建立されたとのことである。たまたま、パンジャーブからの参詣人に聞くと、パティヤーラーにもサッティヤナーラーヤン寺院があるそうである。祈禱僧は、マトウラーからでている普及本とバールガヴァ版を所有していた。マトゥラー版は村人に貸してあるとのことである。金と時間を節約するため、村人は普及本を貸り、自分で読んですませ

るとのことである。老祈禱僧は、使い古したバールガヴァ版を寄贈してくれた。

アラーハーバード、デリーの語り手はいずれもウッタル・プラデーシュ州の出身で、中等教育を終え印刷工として働いている。時々、近所の人々の依頼でカターを語るとのことであった。アラーハーバードの語り手はバールガヴァ版、デリーの語り手はデリーの普及本を手にしていた。

インドールの語り手の一人はバールガヴァ版を手にしていたが、もう一人の語り手は暗記していて普及本を用いていなかった。二人共、ベナーレスでシャーストリー（Śāstrī）の資格を取得し、インドールのカレッジで教職にあった人たちであった。

各調査地での限られた滞在期間中、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターに出合うことは偶然事といってよい。私たちが会衆の一員として参加することにより、テープレコーダーやカメラを使用することによって、語り手はいつもと同じようには語らないであろうとは予測していた。いつもの、あるがまゝのカターを採録することは不可能であるとしても、できるだけ近いものを採録しようと努めた。

アラーハーバードでの事例は私たちの予測通りであった。撮影は控え目に行い、テープレコーダーは目立たない所に置いたにも拘らず、語り手は団長を過度に意識し、例証を長々と語った。このため、再三再四、施主の婿から注意され、語り手はいつものペースを失ったようであった。夕方六時一五分より始まり、供養に一八分、一章三〇分、二章二五分、三章三五分、四章二〇分、五章一〇分、護摩、讃歌に一五分、所要時間二時間三三分で、このうちカターに要した時間は二時間であった。パータク（Śrī Pāṭhak）氏はベナーレス出身のバラモンでアラーハーバード・ベナーレスの文壇、出版界の大御所である。敬虔な夫人に施主の座を譲り、毎月行っているのであるが、今日はいつもの時

間の二倍半かゝったと苦笑していた。パータク家と語り手の関係は、雇主と使用人であり、このため、婿が再三再四注意できたのであろう。

前日、私たちのアラーハーバード到着を祝って、団長の旧知であるアラーハーバード大学助教授グプタ（Dr. Jagdis Gupta）氏が自宅でサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターを催してくれた。到着の日、所用で忙殺され私たちは出席できなかった。翌朝まで祭壇をそのまゝにしておいてくれたので撮影することができた。語り手はカンニャクブジャバラモン（Kanyakubja Brāhmaṇ）のパンディット・アワスティー（Pt. Avasthi）氏で使用普及本はケーラーリーラール版、近所の人々が参加し、近来にない盛況であったとのことであった。私たちが参加しなかったことが幸いしたのであろうが、会衆がアワスティー氏の学識技量に敬意を払っていることが原因であろう。

デリーでは、ヤムナー河の対岸にある出版社の倉庫が借りられたので、こゝに泊っている使用人に供養護摩の材料の買物を依頼し、近所の人々に集ってもらった。四〇人の会衆の大半はパンジャーブからの難民でアールヤ・サマージ（Ārya Samāj）の会員で、スィック教徒もいた。あとはウッタル・プラデーシュからの出稼人であった。夕方、六時半より始まり供養に二五分、一章に三五分、二、三、四章はサンスクリットの朗読だけで各五分づつ、五章に四五分、護摩、讃歌に二五分、所要時間二時間二五分、このうちカターに要した時間は一時間三五分であった。二、三、四章をサンスクリットの朗読だけですませたのは会衆から長すぎると抗議が出たためであった。それでも一章の汚濁の世の描写に老婦人たちは溜息をつき、トウルスィーダースの詩句がでて来ると唱和していた。

インドールでは、団長の旧知シャームー・サンニャースィー（Śrī Śyāmū Sannyāsī）氏宅で採録した。氏は、作家であり、インド伝統医学の医師でもある。供養、護摩の材料を整える負担を主婦にかけない、できるだけ簡素に、語り手

にはいつものように語ってもらう、謝礼、車代を受けてもらう、との要望が理解されためと、サンニャースィー氏の仲介ですぐれた語り手にめぐり合えたため、アラーハーバード、デリーでの事例を繰り返えすことはなかった。いずれも夕方六時から始まり、一つの所要時間は一時間四〇分で、カターに要した時間は一時間であった。もう一つの例は一時間一五分であった。インドールで高名なパンディット・ラマーカーント・シャーストリー（Pt. Ramākānt Śāstri）氏によるものであり、これまで報告した普及本に見られない解釈があるので、こゝに紹介したいと思う。

シャーストリー氏は一九一六年、マナサー（Manasā）生れ、シャーンディルヤ・バラモン（Śāṇḍilya Brāhmaṇ）である。八歳の時、師のガンガーダル・シャーストリー（Pt. Gaṅgādhar Śāstri）により聖紐とガーヤトリーマントラ（Gāyatrimantra）を授けられ、文法、論理学、天文学、ヴェーダーンタ、プラーナ、ウパニシャッドを学び、ベナーレスで受験して、シャーストリー、アーチャールヤ（Ācārya）の資格を取得し、七〇年停年退職するまで、三〇年間、インドールのサンスクリット・カレッジで、哲学、文法、文学を講じていた。年一回、バーガヴァタ・カターを語るだけで、ヴラト・カターは行わないが、依頼があれば語るとのことである。人々の現実の生活に即して、経典がなにをいおうとしているか説くことが、カターの目的であると、シャーストリー氏は語った。

ナワルキショール版の一章にあたる部分が終ると、五人の信徒、バラモン、シュードラ、二人のクシャトリヤ、ヴァイシャの物語りであると前置きし、最後は、あらゆる種姓、住期の男女の義務、規範であると結んでいる。

ナワルキショール版の頌を数字で示し、シャーストリー氏の説明を付すことにする。

I—7、青味を帯びた黒色の肌をし、黄色の布をまとっている。

11、ナーラダ仙は、生きとし生けるものが罪業に苦しんでいる光景を思い浮べると、身の毛もよだつと、ナーラー

ヤンに訴える。

12、ナーラダの質問をヴィシュヌ神は褒めて、よき人の心はバターのようなもの、バターは熱に溶け、よき人の心は他人の苦痛に動かされる、と云う。

15、ナーラーヤンの意味は、世界が洪水に没した時、水中に住むものであり、人々の心に宿るものである。

19、夕刻、薄明の時刻はシャンカラ（Śaṅkara）の時間でめでたい。バラモンの意義を説き、ヴァスィシタ（Vasiṣṭha）ヴィシヴァミトラ（Viśvamitra）の話を引用し、バラモンの精神上の優越性を力説する。

24、不殺生、慈悲、布施が失われた汚濁の世では、真理こそ唯一の拠り所である。

Ⅱ—2、乞食の意義。

9、ヴラトをしようとの決意こそ重要で、この決意を持続させることが、サッティヤナーラーヤン・ヴラトの意義である。

21、バラモンは木樵にヴラトの儀規を教える。カースト体制批判が聞かれるが、本来のバラモンの態度はこのように寛大である。

24、薪は白壇の値段で売れた。

Ⅲ—3、バドラシーラー河とはすばらしい譬えである。バドラター（bhadratā）は社会的人格のすばらしさ、シールター（śīlā）は個人の倫理性を示す。王宮の栄華を離れて河のほとりでヴラトを行っている意味。

10、15、打算、心積りといった商人の態度は排すべきものである。あえて夫に反対しなかった妻の態度は貞節そのものである。夫の言は神のことばであるからである。

25、サッティヤナーラーヤンの呪いとは、実は、商人自身の良心の呵責である。

Ⅳ—6、28、船が沈んだと見るのは、見るものの心の投影である。

43、サンクラーンティ、満月の日にヴラトを行う意義。サンクラーンティは、太陽が一つの天宮に入る日であり、太陽は生命力を支配するものである。月は精神を支配するものである。サンクラーンティと満月の日にヴラトを行うことは、心身に関わることである。

Ⅴ—2、おさがり、つまり、プラサード（prasād）とは喜び（prasanntā）であり、神の喜びを蔑ろにするとは許されないことである。狩猟は譬えであり、人の感覚器官が捉える現象界そのものである。

6、一瞬のうちに、百人の息子と富、財産、領土が失われることがありえようか。これは悪夢なのである。

以上の抜き書きがシャーストリー氏の解釈である。

採録の事例として落すことのできないものがある。

団長の旧知であるミルザープル（Mirzāpur）在住の弁護士ゴーピーナート・ヴァルマー氏（Śrī Gopīnāth Varmā）より贈られたテープである。七一年の調査の際、依頼しておいたものであった。日時は、シュラーヴァナ月（Śrāvaṇa）満月の日の朝、ヴァルマー氏が家長として、バールガヴァ版のテキストと訳をそのまゝ朗読し、家族の成員が参加したもので、所要時間約四〇分。バラモンに依頼することなく、家庭内で家長が行う例が増加しているのであろう。

インドールで、バラモンの婦人トゥルサー・デーヴィー（Tulsā Devī）から婦人たちの間で行われているヴラト・カターを採録した。マールワーリー（Mārvāṛī）社会で特にポピュラーである、サッティヤナーラーヤン・ワールター（Satyanārāyaṇ vārtā）という所要時間三分の話を語ってもらった、信心深い妻からヴラトをするよう云われた商人は、

空腹に耐えられない、とサッティヤナーラーヤンに訴える。純心な願いに打たれた神は宝石を与え、七代にわたって繁栄するよう祝福をした。商人はヴラトと参詣を続け、巡礼宿泊所を寄進した、というのが内容である。バラモンを招く出費、時間の節約のためであるとのことである。

最後に、七一年にデリーで購入したサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターのレコードに触れる。語り手はパンディット・ヴィノード・シャルマー（Pt. Vinod Śarmā）で、内容から、ナワルキショール・ヴェーンカテーシワル・バールガヴァ版系統の普及本に基づいたものであろう。二ヶ所にわたって、嘘なきことばと行為によって自らの人生を実りあるものとするよう力説している。Ⅰ—11・12、Ⅱ—17・18、Ⅲ—39・40、Ⅳ—13～16、でそれぞれ讃歌が挿入され効果を出している。語り手が特に強調する箇所とも一致している。ヴラト・カターで販売されているレコードはこれだけであり、このカターの普及ぶりを示すものであろう。

1 *Satyanārāyaṇa kathā Hindītīkā*, Bambai, Khemrāj Śrīkṛṣṇdās "Śrīveṅkaṭeśvar" Press, 〔n. d.〕.

2 *Satyanārāyaṇa vrata kathā Bhāṣāṭīkā*, annotated by Gomtīprasād Miśra, Vyākaraṇa Poṣṭācārya, Nyāya-Sāhitya-Śāstri, Vārāṇasī, Bhārgava Book Depot, 〔n. d.〕.

3 *Satyanārāyaṇa vrata kathā*, annotated by Jvālāprasād, Ilāhābād, Durgā Pustak Bhaṇḍār, 〔n. d.〕.

4 *Satyanārāyaṇa vrata kathā, prasāṅgik chandoṁ tathā ślokoṁ se susajjit Bhāṣāṭīkāyukt*, annotated by Kedārnāth Miśra *'Cañcal'*, Ilāhābād, Durgā Pustak Bhaṇḍār, 〔n. d.〕.

5 *Satyanārāyaṇa vrata kathā*, annotated by Jagannāth Śarmā, Dillī, Dehātī Pustak Bhaṇḍār, 〔n. d.〕.

Satyanārāyaṇa vrata kathā, Dillī, Pañjābī Pustak Bhaṇḍār, 〔n. d.〕.

Satyanārāyaṇ vrata kathā, Dilli, Paṅjabi Pustak Bhaṇḍār, 〔n. d.〕.

6 *Satyanārāyaṇ brat kathā*, tr. by Sardār Becū Singh '*Haribhajan*' Nizāmābādi, Ilāhābād, Dés Sevā Press, 1960.

7 *Satyanārāyaṇa vrata kathā*, annotated by Vāyunandan Miśra, Karmakāṇḍi, Vārāṇasi, Māṣṭar Khelāṛilāl Saṅkaṭā prasād, 1973.

8 *Satyanārāyaṇa brata kathā Bhāṣāṭīkā itihāsa samuccaya*, annotated by Ratankumār Bājpeyī '*Amarkumār*', Kānpur, Jantā Book Stall, 〔n. d.〕.

9 *Satyanārāyaṇa vrata kathā saptādhyāyī*, annotated by Daulatrām Gauṛ, Vārāṇasi, Ṭhākurprasād & Sons, 〔n. d.〕.

Satyanārāyaṇa vrata kathā, annotated by Prabhudatt Brahmacāri, Jhūsi, Saṃkirttan Bhavan, 〔1969〕.

おわりに

サッティヤナーラーヤンという神格、このカターの成立、プラーナ文献との関係等について問題は多い。いずれも私の専門外のことであるので、結びに代えて簡単に触れることにしたい。

サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターについての研究はサッティエーンドラのものが唯一である。(1) 要約すると、このカターの萌芽をヴェーダの神ヴァルナ（Varuṇa）に求め、ハリシチャンドラ（Hariścandra）の物語、民話サッティヤハリシチャンドラ（Satya Hariścandra）、と跡づけている。ハリシチャンドラの物語、このカターをこのように分析している。ハリシチャンドラはヴァルナに息子を祈願し、生れたら供犠をすると約束する（商人はサッティヤナーラーヤンに子宝を祈願し、生れたらヴラトを行うと約束する）息子が生れるがハリシチャンドラは言い訳をして約束を果さな

い（娘が生れるが商人は約束を果さない）ローヒタ（Rohita）は森へ逃れる（商人は婿と共に商売に出る）ローヒタはシュナハシェーパ（Śunaḥśepa）を供犠にしようとする（婿は船と共に水中に没する）ヴィシヴァミトラの願いでヴァルナはローヒタを許す（供養によって婿は姿を現わす）

神格については、サッティヤと天則リタ（ṛta）がヴェーダではアヌリタ（anṛta）の反意語として用いられていること、ナーラーヤナ（nāra-ayaṇa）は水の主でヴァルナと同一であるとしている。

しかし、各章の終りに付されている、「スカンダ・プラーナ、レーヴァー編」、が説明されていない。

こゝ五〇年にわたって、このカターの原本を探しているディヴェーカルによれば、[2]『スカンダ・プラーナ』のどの版にもこのカターはないとのことである。雑誌『カルヤーン』（*Kalyāṇ*）の特集号として『スカンダ・プラーナ』のヒンディー訳が出ており、このカターはベンガル本からとして収録されている。ディヴェーカルは、ベルガルの王立アジア協会図書館からサッチャー・ピール信仰（Saccā Pīr）について教示されたにも拘らず、コーンカン（Koṅkaṇ）地方から『スカンナ・プラーナ』前編（*Skanna Purāṇa*, Pūrva khaṇḍa）を発掘し、これが誤って『スカンダ・プラーナ』レーヴァー編となったのであろうと想定し、新しいテキストを公刊するといっているが、未見であるのでコメントは控えたい。

ヴェーンカテーシワル版に基づいて『スカンダ・プラーナ』を解説しているラームダース・ゴウルは、この版にサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターは収録されていないことを認めながらも、異本が多く、膨大なこの文献には、こうした数百のカターが散佚している可能性を指摘し、本当に収録されていたのかも知れないし、後になって挿入されたのかも知れない、[3]としている。

このようにプラーナ文献との関連は興味深い。[4]

ムガル皇帝アクバルのディーン・イラーヒーを広めるためにこのカターが書かれたが、パンディットたちがこれをプラーナ風に、ヒンドゥーイズムに適うようにした……ベンガル語のカター「サッティヤ・ピール」はおそらくこれであろう、とする説もある。[5] なにに基づいての説なのかは不明である。

成立年代、扱う資料はかならずしも一致していないが、ベンガルにおける研究は、聖者崇拝から、ヒンドゥー・ムスリム両教徒にとっての共通の神格、サッティヤ・ピール、または、サッティヤナーラーヤンとなった、としている。[6] イスラームの為政者を欺く策略だった、とする説もあるが、[7] ほとんどが両教徒の融和の結果だったとしている。ほぼ定説となっているようで、インド史の概説書[8]にそのまま引用されている。

ベンガルの地から全インドに広まった、[9] とされているが、どのような内容で伝わったかは不明である。

おそらく、サッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターは、ある意図でもって作りあげられたものであろう。ヴァルナ、ハリシチャンドラの物語りに遡ってもよいし、子宝を願う民話に起源を求めてもよいが、三章における子宝を願う商人の物語がまず成立したのであろう。この物語を核に、貧しいバラモンの話、木樵の話が付加され、続いて、四、一、五章の順に整えられ、ヴィシュヌ信仰化されたように思われる。

北インド各地におけるこのカターの写本、[10] ベンガル、アッサム、オリッサにおける写本を検討し、それぞれの地域における伝承、儀礼をつき合わせることによって、このカターの成立と伝播をめぐる問題が明らかにされるように思う。別の機会に、ベルガルにおけるこのカターの普及本と採録テープを検討したいと思う。[11]

1 Satyendra, "Braj ke lok vratānuṣṭhān", *Bhāratīya Sāhitya* (Oct., 1960) Vol. 5 No. 4, Āgrā, Āgrā Viśvavidyālay, pp. 308—14.; *Braj lok sāhitya kā adhyayan*, 2nd., Āgrā, Sāhitya Ratn Bhaṇḍār, 1957, pp. 356—60.

2 Hari Rāmcandra Divekar, "Satyanārāyaṇ kathā : ek śodh", *Kādambinī* (May, 1970), pp. 18—21.

3 Rāmdās Gauṛ, *Hindutva*, Kaśi, Gyānmaṇḍal, 〔1938〕, p. 348.

4 私たちが収集した『スカンダ・プラーナ』の普及本には、三六頁よりなる「サッティヤナーラーヤナとバラモンの対話」として、ナワルキショール版の第一章に相応する物語りが収められている (Satyanārāyaṇa viprasaṃvādavarṇana, *Skanda Purāṇa, Bhāg* 2, tr. by Śrīram Śarmā, Bareli, Saṃskṛti Saṃsthān, 1970, pp. 498—504.) サッティエーンドラ博士の教示によれば、このカタローは『バヴィシャ・プラーナ』にあるとのことで、普及本で確めたところ、「サッティヤナーラーヤナ物語 (一一頁)、「チャンドラチューラ王物語」(一一一)、「ビッラの物語」(五三)、「シャターナンダバラモンの物語」(三六)、「商人の物語」(四八)、「牢獄より釈放された商人の物語」(七〇) が収録されている (*Bhaviṣya Purāṇa, Bhāg 1*, tr. by Śrīrām Śarmā, Bareli, Saṃskṛti Saṃsthān, 1970, pp. 357—400.) 三章で言及したカーンプル版の内容とほぼ一致している。

5 Rāṇāprasād Śarmā, ed., *Paurāṇik koś*, Vārāṇasī, Gyānmaṇḍal, 〔1971〕, p. 509.

6 Dinesh Chandra Sen, *History of Bengali language and literature*, Calcutta, Univ. of Calcutta, 1911. pp. 683—87, 796—98.; *The folk-literature of Bengal——being lecture deliverered to the Calcutta University in* 1917, *as Ramtann Lahiri Research Fellow in the history of Bengali langnage and literature*. Calcutta, Univ. of Calcutta, 1920, pp. 98—113.

Kshitimohan Sen, *Medieval mysticism of India*, anthorized translation from the Bengali by Manmohan Gosh, London, Luzac & Co., 1935, p. 37.

Tamonash Chandradas Gupta, *Aspects of Bengali society from old Bengali literature*, Calcutta, Univ. of Calcutta,

1935, p. 99.

Kalikinkar Datta, *Studies in the history of the Bengal Subah*, 1740—70, *Vol.* 1 : *social and economic*, Calcutta, Univ. of Calcutta, 1936, pp. 96—97.

J. C. Gosh, *Bengali literature*, London, Oxford Univ. Press, 1948, p. 86.

M. E. Haq, *Muslim Bengali literature*, Karachi, Pakistan Publications, 1957, pp. 88—89.

M. A. Rahim, *Social and cultural history of Bengal*, *Vol.* 1, 1201—1676, Karachi, Pakistan Historical Society, 1963, p. 99.

7 Benoy Kumar Sarkar, *The folk-element in Hindu culture–a contribution to socio-religions studies in Hindu folk institutions*, London, Longmans, 1917, p. 220.

8 J. C. Powell-Price, *A history of India*, London, 1955, p. 208, 283. ; Ishwari Prasad, *History of medieval India*, 2nd., Allahabad, Indian Press, 1952. p. 375.; R. C. Majumdar and others, *An advanced history of India*, London, 1956, p. 401.

9 Damodar Dharmanand Kosambi, *An introduction to the study of Indian history*, Bombay, Popular Book Depot, 1956, p. 359.

10 *Hastalikhit Hindī granthoṁ kā saṃkṣipt vivaraṇ* 〔1900—55〕, *Vol.* 2, Vārāṇasī, Nāgarī Pracāriṇī Sabhā, 〔1964〕, pp. 502—3.

七三年にカルカッタで山崎利男氏が収集した普及本、採録テープを用いることができなかった。別の機会で検討したいと思う。